

## 国際湿地連合第四回国際ハクチョウシンポジウム の報告

神谷 要

(財) 中海水鳥国際交流基金財団, 683-0855 米子市彦名新田665

国際湿地連合が2001年2月にアメリカで行われたスワンシンポジウムに参加しましたので、報告します。この会議は、10年に一度国際湿地連合が行う国際会議で、世界のハクチョウ類に関する近年の研究成果が一堂に会する会議です。20年前には第二回会議が日本の札幌で行われていますので、この時参加された方も多いことと思います。

### エアリセンター

今回の会議場は、アメリカ合衆国バージニア州(ワシントンDCの近く)のエアリセンターでした。映画「グース」の舞台となった場所の一つで、軽飛行機が雁をつれて到着した場所です。現在は、ナキハクチョウの飛来を回復すべき努力が行なわれています。

エアリセンターは私の想像するアメリカのイメージと違って、広大な芝地と森の中にヨーロッパ風の小さな建物があり、その周囲に木造の宿舎がいくつか建っていました。敷地がとにかく広大で、歩いて外に出ることはできませんでした。いくつかの大きな池があり、そこにはナキハクチョウやカナダガンが越冬しており、近くの森にはハクトウワシが営巣していました。

日本で国際会議場というと、近代的な巨大な建物を想像しがちですがこういった郊外の環境の方が、いい会議ができるような思いがしました。

### 会議

今回のシンポジウムは、2月13日～17日の間に行われ、プレエクスカーションや野鳥関連施設の見学会なども組み込まれていました。会議では渡りルートや、繁殖、保全などの五つのセッションが行われ、鉛問題、ムギの食害の問題からハクチョウの個体群動態、標識による寿命の推定、トランスミッターによる渡り調査など57件の発表があり、いずれも大変興味深いものでした。

とくにヨーロッパでは、コブハクチョウの研究も多く、本来の生息地としての特

殊性を感じまし、アメリカ・カナダ・ロシアの研究はヘリコプターや軽飛行機を使ったものが多く、その生息地であるツンドラの広大さに改めて驚かされました。

今回の会議では、世界30ヶ国108人の参加があり、日本からは、私以外にも、北海道大学のヨーン・アルバーセンさんと別海町の金沢祐二さんが参加しました。日本の参加者の発表については文末の要旨をご参照ください。

### ハクチョウの首輪について

日本でハクチョウに首輪をつけるとき、何で緑と決まっているのか以前から不思議に思っていました。ロシアは赤で、アメリカ用にも国別に色が決まっているのか

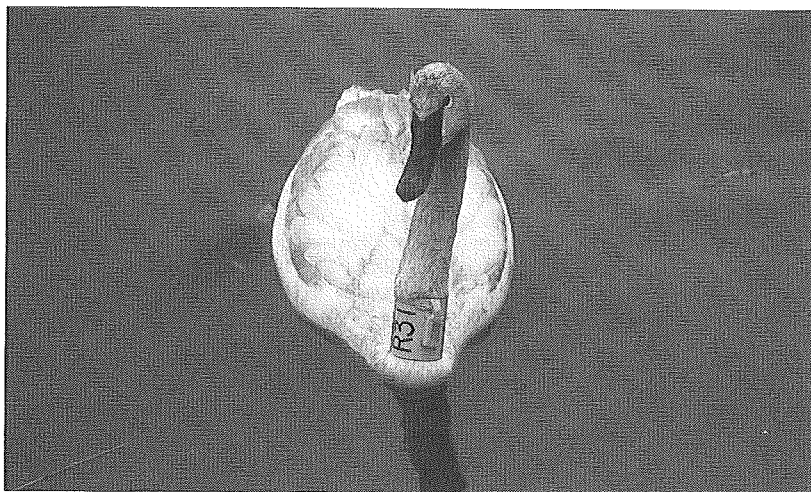


図1. ラジオ発信機付きの首環を付けたトランペッターズワンの若鳥。軽飛行機の誘導によりエアリセンターまで連れてこられた。



図2. エアリセンターの小さな建物の一つ。

と漠然と思っていました。今回アメリカで実にさまざまな色の首輪をハクチョウがつけられているのを見て驚きました。

不思議に思って、今回の開催地のホストであるWillwam J. L. Sladen (Bill)に聞いてみました。すると、なにやらPelle Andersen. Halip(デンマーク)を呼び出し「二人で決めてるんだもん」と肩を組みました。<・・・もちろん冗談でやっているんでしょうけど>。二人は、世界のハクチョウ類に装着するカラーリングの調整役であり、旧北区はPelle Andersen. Halipの担当で、「違う色が使いたいなら言ってくれ、調整するから。そして、必ず連絡してくれ、それが大事だよ」と、真剣な顔で言っていま



図3. アメリカ、チュサピーク湾の給餌場。給餌にはトウモロコシが使われていた。イギリスでは、オオムギを撒く人が多かったので印象的であった。

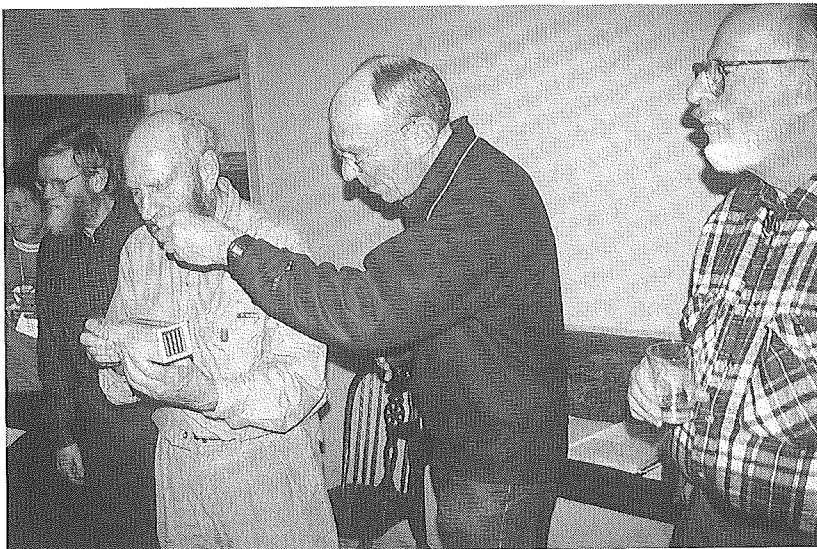


図4. 捕獲したハクチョウの嘴を止める道具を見るビル(左)とアルバートセン(右)。

した。よく学生が、勝手に装着して論文を書き、連絡もなくそのままにしているの  
で困っているそうです。

また、彼らは首輪標識のプレゼンテーションを見せてくれました、アメリカでは、  
ハクチョウの繁殖地をアラスカ・中部・東部に分けて標識していることや、世界中  
でハクチョウに標識した話してくれました。

その中に、日本のスライドで、山階鳥研の若かりし頃の尾崎さんと佐藤さんがハ  
クチョウに首輪をつけているシーンも出てきました。Billが「日本の若い学生」と言  
いるので、「古い話でしょ。」と言ったら笑っていました。

### コハクチョウの嘴

そのプレゼンテーションの中では、アメリカコハクチョウの嘴の黄色は、東の個  
体群では小さく、西の个体群になるほど大きいということでした。さらに、ユーラ  
シアに入ってチュコト半島付近では両亜種が見られ、ユーラシア大陸の西に行くほ  
ど嘴が黄色くなるクラインが見られるということでした。

実際にエストニアの人に聞くと、やっぱり嘴は黄色いものがほとんどだそうです。  
青い目のコハクチョウを知っているかといったら、そんなのはじめて聞いたといっ  
ていました。捕獲の経験が無いそうで、今度じっくり観察してみるといってしまし  
た。



図5. 「アメリカコハクチョウ」左の個体は、アメリカ東部の個体の中では、大きい黄色いパッチと  
持っている個体である。

### スワンシンポジウムでの日本からの参加者の要旨

1. Satellite tracking of the migration of Bewick's Swans (*Cygnus columbianus bewickii*) from Yonago Waterbirds Sanctuary, Lake Nakaumi, Japan. (日本の中海にお  
けるコハクチョウの渡り調査)

神谷要(中海国際交流基金財団)・尾崎清明(山階鳥類研究所)

中海は、日本でもっとも南のコハクチョウ(*Cygnus columbianus bewickii*)の越冬地です。この中海の東端には米子水鳥公園(YWS)(133.17N, 35.26E)があります。ここには約,000羽のハクチョウが越冬しています。

ここで、2回にわたってコハクチョウの人工衛星を使った渡りルートの調査を行ったので報告します。

1回目の調査は、1994年に行われました。この調査で3月31日に1羽のコハクチョウが日本海を直接渡りました。その個体は、900kmを13時間で飛び、ハバロフスク(37.16N, 136.50E)の近くに到達しました。その後、ハンカ湖、三江平原を中継して、アムール川河口付近(52.53N, 139.50E)まで到達しました。追跡できた渡りルートは、1,900kmにも及びました。

同時に調査した他の3羽のコハクチョウは、日本列島沿いに北上しましたが、短い距離しか追跡できませんでした。

2回目に行った1997年の調査では、3月21日~23日にかけて2羽のコハクチョウが日本海を渡ったりしました。そのうち1羽は豆満江(42.22N,130.37E)に到着し、その後は、1994年の調査したときと同じルートを北上し、アムール川河口付近に到達しました。

また、同時に調査した他の2羽については、4月中旬まで日本列島沿いに北上するのを確認しました。

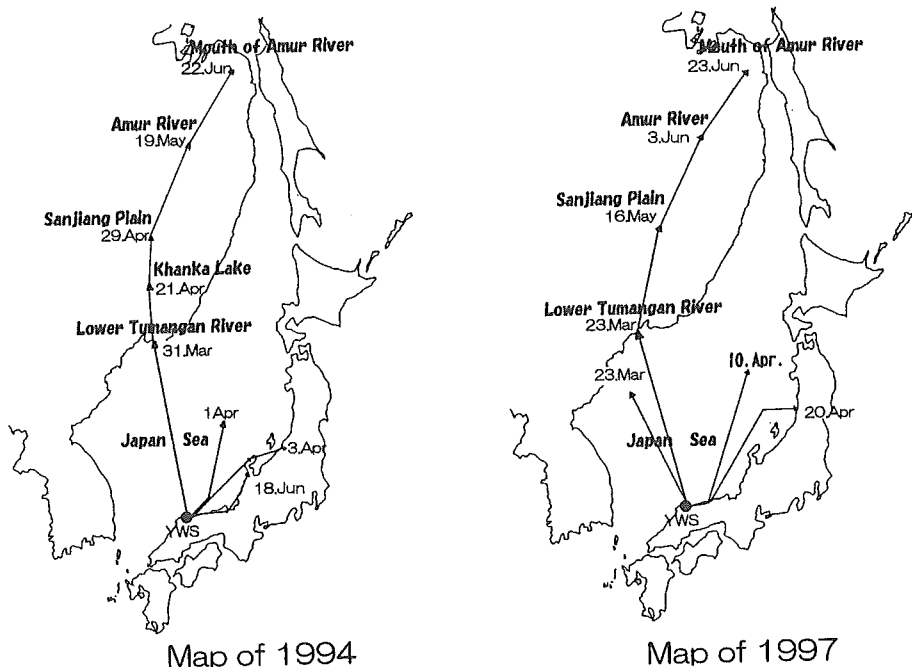


図6. 米子からのコハクチョウの渡りルートの例。

これらのことから、地中海に飛来するコハクチョウには、二つの渡りルートがあり、その一つは日本列島沿いに北上するルートであり、もう一つは今回発見した日本海を直接渡るルートである。

## 2. East Asian Swans - population development and wintering ecology of swans in Japan (東アジアのハクチョウ個体群の増加と日本におけるハクチョウの越冬生態)

John O. Albertsen(北海道大学厚岸臨海実験所)・金沢祐二(日本白鳥の会)

日本で冬を過ごしているオオハクチョウとコハクチョウの個体数は、最近の10年間に大きく増えました。それは、毎年行われる環境庁の全国一斉ガンカモ類調査の最近20年間の結果で大幅な増大が示されているからです。

東アジアフライウエーを利用する約60,000羽のオオハクチョウとコハクチョウは、10月半ばから日本に到着します。この数は、中央アジアと東アジアの総個体数と比べても遜色ありません。さらに、越冬地では、それに150羽のコブハクチョウが加わります。

しかし、日本において自然の餌の少ない時期に約6ヶ月間過ごすハクチョウ類は、農地における採餌や人工的給餌によって有り余る餌を得ることができます。

このような人工的な給餌は、日本では長い伝統を持ち、そのような場所の数は最近の20年間に増加しました。現在、ハクチョウ類とその他の水鳥に対して給餌している場所は、約300箇所を超えています。

ハクチョウ類の約60%はこのような給餌場所で観察されており、そこで与えられている餌はたいてい米かパンです。このため、ヨーロッパやアメリカの個体群のように、農業被害についての大きな問題を引き起こしていません。

Table 1: Data regarding artificial feeding sites in Japan. The table shows location, when the program was initiated, food type, approximate kilograms per day, and the number of swans using the site.

Prefecture	Location	Site	Started	Food type	Kg/day	Number of swans
Hokkaido	Hamatonbetsu town	Lake Kutcharo	1973	Bread and unripe rice	60	Winter (481 Bewick's) / Staging (12000 Bewick's)
Hokkaido	Wakkanai city	Lake Onuma	1995	Bread and barley	40	Winter (90 Whooper s) / Staging (10000 Bewick's)
Hokkaido	Abashiri city	Lake Tofutsu	1974	Bread	8	Winter (367 Whoopers) / Staging (10000 Whoopers)
Hokkaido	Obihiro city	Tokachi River	1990	Barley	5	Winter (122 Whoopers) / Staging (500 Whoopers)
Aomori	Tennabayashi town	Tsubo River	1993	Unripe rice	10	Winter (407 Whoopers)
Aomori	Hiranai town	Asakokoro Beach	1987	Unripe rice	8	Winter (442 Whoopers)
Iwate	Morioka city	Kitakami River	1978	Unripe rice	5	Winter (370 Whoopers)
Miyagi	Shiroishi city	Shiroishi River	1988	Unripe rice	10	Winter (302 Whoopers)
Miyagi	Wakayanagi town	Hazama River	1978	Unripe rice	10	Winter (263 Whoopers + 928 Bewick's)
Miyagi	Wakayanagi town	Lake Izunuma	1970s	Unripe rice	10	Winter (156 Whoopers)
Miyagi	Kitakami town	Sarakai River	1990s	Unripe rice	7	Winter (54 Whoopers + 46 Bewick's)
Akita	Nakasen town	Tama River	1992	Unripe rice	25	Winter (1312 Whoopers)
Akita	Jumonji town	Mimase River	1975	Unripe rice	15	Winter (332 Whoopers)
Yamagata	Sakata city	Mogami River	1975	Unripe rice	20	Winter (5550 Whoopers + 2820 Bewick's)
Fukushima	Kagamishi town	Koya Pond	1976	Unripe rice	15	Winter (288 Whoopers + 10 Bewick's)
Fukushima	Fukushima city	Abukuma River	1974	Bread and unripe rice	320	Winter (234 Whoopers + 680 Bewick's)
Niigata	Suibara town	Lake Hyoko	1955	Unripe rice	30	Winter (132 Whoopers + 3452 Bewick's)
Tottori	Yonago city	Yonago Sanctuary	1980	Unripe rice	40	Winter (1 Whoopers + 798 Bewick's)

The wintering numbers are from EAJ (1999), while the numbers for the staging period are estimated by local contact persons. This site is a preferred wintering site for ducks with 15 524 ducks counted in mid-January 1999 (EAJ 1999).